

マルク・リシールの思想の源流とリシール 空想論

文学研究科1回生 勝田岬

渡航目的

マルク・リシール・アーカイブ（ドイツ／ヴッパータール）訪問
とリシール空想論の研究。

アーカイブの本棚

成果

（１）リシール思想の源流の発見。

リシールは第一世代の現象学（フッサール、ハイデガー）だけでなく、同時代の哲学・現象学、ドイツ観念論、近世哲学、新プラトン主義、ギリシア哲学、自然科学、数学、論理学、文化人類学、美学、精神分析などを読み自らの思想を糧にしていたことが蔵書から分かる。一般的に哲学者には糧とする哲学者に偏りが見られるが、リシールは網羅的である。とりわけリシールのプラトン、アリストテレス受容は注目に値する。リシールのギリシア思想受容はこれまであまり知られていなかったが、これらを考慮に入れて研究する必要がある。



（２）空想論の研究。

リシールが本格的に空想論に着手した書物は2000年の『射影する現象学』である。残念ながら、リシール所蔵の『射影する現象学』には書き込みが少なく、そこに関して新しい発見は得られなかった。しかし著作を十分に読み込むことで一つの示唆を得た。現象学的に見れば、空想は知覚から断絶したところで作動する具体的な運動である。それゆえ2004年の著作『空想、想像、情動性』で新たな仕方
で現象学的人間学を構想することができたのである。

（３）翻訳の入手。

リシールのフランス語文献をドイツ語に部分翻訳した『意味形成の冒険』（*Das Abenteuer der Sinnbildung*）を入手することができた。この著作の中の部分翻訳の中には、私が今現在研究している著作『射影する現象学』の部分翻訳も含まれている。これらはリシールの哲学用語を翻訳するうえで参考になる。